

# 福澤諭吉の明治初期金融史上の地位

高 垣 寅 次 郎

明治維新の変革に伴ない、日本の金融制度は急角度の変転をとげて、きわめて興味の多いいろいろの問題を提起した。しかし維新以後の金融史に関する著書論文はすでに多いが、同じ資料に違った解釈を試みたり、資料の配列を変えて見るだけではあまり大きな意味はない。埋もれた資料を拾い上げ、隠れた資料を引き出して、新しい事実を明かにしてこそ、真に意義のある歴史的研究ができる。私はこのような見地に立って、明治初期の金融制度について、ささやかではあるが何程かの著書論文を発表してきた。明治初期金融制度の研究には、この視角から見て興味のある問題が多くのかさされている。

このような見地に立つとき、明治初期の金融制度について大隈重信の占める地位は甚だ大きな意義がある。維新の当時から明治一四年十月の政変によって悲憤を抑えて台閣を去るに至るまで、大隈重信は外国官副知事、大蔵大輔、大蔵卿参議などとして、日本の財政金融を掌理する樞要の地位に立っていた。その当時の官庁書類、往復文書など一万二千点に上る老大な資料が、大隈文書としていま早稲田大学図書館に収蔵されている。それら

#### 福沢諭吉の明治初期金融史上の地位

の多くは未だ利用されていない、いわば未開拓の境地にぞくする。明治金融史のある部分はこれによって、書き改められるべきはずである。

これらの問題について私はすでに、数篇の論文と近代日本金融史の小著を世に問うたが、なお研究を続ける中途にある。大隈侯を思うとき、それと並んで明治初期の金融制度に、いかなる寄与があったかを想起せざるをえないのは福沢諭吉である。維新前後から明治を通じて、ひろく西洋文化の移入に、経済思想の開発に、先生の果たした役割はきわめて大きい。特に明治の初期においては、大隈参議と甚だ密接な関連があり、政策についても理論においても互に相通するものがあつた。

このような観点に立つて、貨幣金融の諸問題について福沢諭吉がどのような見解をもっていたかを尋ね、それが現実の制度の上にかくに結実されたかということ、能う限り基本的な資料によって明かにして行きたい。政治の指導者と思想の開拓者と、互に関連せしめて見るところに私には大きな興味がある。

#### 一、明治初期の福沢諭吉

福沢諭吉は天保五年（一八三四）十二月一二日、大阪の中津藩蔵屋敷に生れた。はじめ蘭学を修めたが、安政六年二六歳のとき英学に転向することを決意した。最新の西洋文化に接するためには、すでに蘭学の及ばないことを悟ったからであろう。文久二年二九歳のとき遣欧使節に加わって、一月長崎を立て十二月帰朝した。元治元年十月には幕府に召抱えられて外国方翻譯局に出仕し、慶応三年一月には、幕府の軍艦受取委員の一行に加わってアメリカに渡り、同年六月に帰朝した。明治維新のときはすでに三五歳であつて、思想はまさに円熟し、

西洋の事情には精通していた。六月に新政府に出仕の命を受けたけれども、病と称して固辞して出なかった。

慶応二年から明治一〇年に至るまでの間に、その著わしたものは甚だ多数に上り、また多方面にわたっている。

西洋事情、雷銃操法、西洋旅案内、条約十一国記、西洋衣食住、兵士懷中便覧、窮理図説、洋兵明鑑、掌中万国一覽、英国議事院談、清英交際始末、世界国尽、啓蒙手習之友、学問のすゝめ、童蒙をしえ草、帳合之法（明治六、七年）、日本地図草稿、文字之教、會議弁、文明論之概略、分権論、民間經濟録などがそれである。これらによっても知られるように、西洋の政治經濟事情を日本に紹介し、日本の開化發達の必要を説くことはその最大の関心事であった。

また明治二年一月には、洋書藥品等の輸入を目的とした丸屋商社の設立に尽力し、保險金融等の新業務を創設する上にも大きな貢獻があつた。殊に「帳合之法」の出版以来、洋式簿記の普及がわが國經濟の發達の上に甚だ重要であることを認めて、それに極めて熱心であつた。滋賀県令松田道之に宛てた明治六年十一月六日付の次の書翰は、當時の事情の一端を伝える上に興味が深いと思う。文中に記された中村道太は、後に正金銀行の設立に重要な役割を果たしたのであつて、そのことは別にさらに詳説するが、このときすでにこのような關係にあつたことは注目すべきである。書翰には次のように述べてある。

「先達は御手紙被下、御支配下の少年へ帳合の法稽古云々の義拝承仕候。私方にて未だ教授を始候場合にも至兼候得共、已に弊社内出版局にては其法を採用致居候義に付、御相談御見習旁御出入の義は不苦、社中の者心得候丈は可申上様御話致し候義に御座候。右の義に付一事申上候。私に一友人あり、名を中村道太と云ふ。或旧藩士族にて、當時は横浜の丸屋社中に入り商売を業となし、弊塾出版局にも關係あり。此人頗る帳合に委しく、

福沢諭吉の明治初期金融史上の地位

丸屋社中の商売、諸店合して一年十萬兩よりも多く、其帳合の法全く西洋流に従ひ、拙訳帳合の法に拠て其出納を司る者は右中村氏一名なり。若しも此度御本県の会計法御改革にも相成候はゞ、一ヶ月許り同人を御頼被成候ては如何。本店の商業も此節ならば一ヶ月位は此人なくして可なり。固より一月にて悉皆帳面の改革は出来申間敷候得共、其大法を悟り帳面の端を致候上は、從來の会計官員にて其端を續く事は容易なるべし。此中村氏は私の親友にて其人物を詳にせり。決して錢を貪る人物にあらず。唯其の学び得たる所を實地に施行せんと欲するのみ……。思召御座候はゞ被仰下度、日本國中一ヶ所にてても眞の帳合法を用ひ度、私の素願に御座候<sup>註一</sup>。

即ち商業実務の改善についても、大きな関心が持たれていたことが知られるのである。丸屋では店内において帳合の法を採用したのみでなく、これを一般に普及せしめるために、明治六年六月から通三丁目の東京店において、これが講習を行った。そのとき講師となつたのは誰であるか確たる資料はないが、中村が造詣ふかく、また福沢先生の信頼も厚かつたことから見て、おそらくはその一人であつたろうと思われる。明治七年四月には国立銀行の事務員養成の目的を以て、大藏省内に会計講習所が設けられたが、丸屋商店はそれに先んじており、しかもそれは福沢先生の考案によるものと見てよからう。<sup>(註二)</sup>

当時、時代の思想的先頭に立つた先生として、日本の經濟がどのような状態にあつたか、貿易は何故に阻害されていたか、貨幣金融の制度には欧米に較べてどのような差があり、それらをいかに改善すべきかについて、身をもってそれを体験し、十分にそれを理解し、痛切にその必要を感じていたに違いない。

維新の当時から、教育、政治、經濟のあらゆる面にわたり、西洋の新知識を日本に移入するについて、つねに重要な地位に立つと見られるに拘らず、西洋の文物制度を日本に移植するについて大きな役割を果たした先生が

維新後の貨幣制度の確立、銀行制度の輸入について、どのような見解をもち、方策を考えたかということは、何とか明かにして見たいものである。これは誰しもそのことを当然として期待するであろうが、誠に不思議にもこれらについて何の発言も見られない。その著書論文または書翰を通じて、それらについて何の手がかりも得られない。

上野の山にこだまする維新の戦争の銃声を聞きながら、塾生に講義を続けたのもウエイランドの「経済学要義」であった。それは古典学派の理論をつたえた簡明な教科書であるが、当時の日本の情勢にたいして、示唆するものが多かったはずである。<sup>(註3)</sup>先生の関心が少からず産業経済の問題に向けられていたことは、著書論文その他の資料から判断し得ることである。しかるに貨幣金融の制度については、明治一〇年までの多事であった期間をとる限り、何の発言も見出されないのは何故か。私にはその疑問を解く道が見出されないのである。

当時福沢先生は官途を厭うて野にあり。このような貨幣銀行の如き問題は、専ら官権の掌どるところであったが故に、それらについて意見を現わす機会はなかったという見方もある。しかし当時それらの問題については、在官の吏僚をはじめ在野の町人に至るまでから、意見書、上申書の類が頻りに提出されたことは、大隈文書の中に数多く残っている資料によっても知られるのである。従って、福沢先生にその機会がなかったともいえないし、またそれに気付かなかったとも思われない。これはこれらの問題に対する興味がなかったか、或いは殊更にそれに背を向けていたという外はない。

貨幣銀行の制度がいちおうその形を整え、しかもその運営よろしきを得ない時期になって、「明六雑誌」(明治七年三月—八年十一月)、「民間雑誌」(明治七年二月—八年六月)、「家庭叢談」(明治九年九月—一〇年四月)な

どが出るようになり、広く多方面の問題にわたって大衆に訴え、その識見をひろめることを努めた。けれどもその中にはまだ金融について、指摘すべきものは見出されない。

その後明治一五年三月になって、時事新報に連載された通貨論の中には次のように述べてある。明治元年新政府において金札を発行し、初めは流通意の如くではなかったが、明治二年四月布告を発し、正金と同様に通用すべきことを厳命してから、「國中この令に背く者なく、通用誠に滞なくして絶て疑を抱く者を見ず。恰も天下の人心を一朝に変換したる者の如く」であった。これは政府の厳令に由るとはいいながら、人民が政府を信じなくては、いかような令があっても行わるべきではない。一令の下にこれに服したのは、国民が政府を信ずることの厚いことを見るに足るのである。「明治政府は維新の初め、通用貨幣の一事に付ては俯仰天地に恥るなきの処置を施して人民の望を収攬し、開闢以来我日本政府に比類なきのみならず、世界万国に対して誇る可き立体の徳義を表したるものと云ふ可し<sup>(註4)</sup>」と。

これによって見ると、明治初年における金札の発行も、貨幣本位の確立もなんらの困難を見ることなく、順調に行われたものと解し、政府の処置を讚美していることになる。当時の貨幣制度にふかい省察を試みることなく過されて来たものといっても過言ではないようである。

註(1) 福沢書翰、明治六年十一月六日付、滋賀県令松田道之宛、続福沢全集第六卷、五四三—五四四頁。以下すべて便宜のため引用文に句読をつけた。

註(2) 丸善社史（昭和二六年）、四二—四三頁参照。当時の丸善商社講習会のピラは故徳川武定氏が所蔵されていた。誠に興味がふかいので特に請うて、その複写を一橋大学附属図書館に寄贈を受けた。

註(3) Francis Wayland, *The Elements of Political Economy*, Boston, 1837; Do., abridged and adapted to the use of schools and academies, Boston, 1840.

註(4) 通貨論、明治一五年三月一三日―六日、時事新報連載、福沢諭吉選集第三卷、二六七、二六九頁参照。

## 二、参議大隈重信との交渉

福沢諭吉の金融論議は、明治一一年五月に出版された「通貨論」に始まるといつてよい。これは通貨に関するその見解を知るためには、小冊子ではあるがきわめて貴重な文献である。ここでは通貨論執筆についての大隈参議の協力を述べて、後の政策上の協力に至る事情を明かにするよすがとし、次で通貨論における主張を検討して後の金融論議の底を流れる基本理論を明かにすることを努めたい。

通貨論はその前半において通貨の性質を明かにし、後半において歴史的事実に基づきそれを論証する方法をとっている。これは当時の紙幣の流通を弁護する立場をとるものであり、従つて本質的には紙幣論者なりとする見方もあるが、全篇を貫く論旨からいえば、決してそのように見ることはできない。これは当時、盛んになった一般の机上論議に対し、現実の流通現象に立脚すべきことを強調したものであった。

当時の論壇には、鼎軒田口卯吉が一方の陣を張っていた。明治一一年一月に出たその著「自由交易日本經濟論」において、純然たるメタリストの立場をとり、貨幣の基本的職能を価値の尺度たることにありとしたのに対し、福沢先生は一般的交換手段と見ることを以て対立した。不換紙幣の害悪を鳴らして兌換制度を確立すべしという

に対して、紙幣制度の必ずしも不可ならざることを以て對抗した。机上の抽象論議をさけて、現実の流通現象を直視すべきことを強調したのである。<sup>(註1)</sup>そしてその論述に必要な資料は、大隈参議大藏卿から得たものであった。

大隈参議は天保一〇年の生れであるから、福沢先生は五年の年長にあたる。両者の交渉が何時の頃に始まったかということは、この場合の問題の経緯と思想動向を見る上に、甚だ興味のあることである。現存する資料によって知る限りにおいては、「大隈侯昔日譚」に「確か明治七年頃だと思う。何でも或る所で、別に意味のある企てではなかったが、議論家や学者の会合であって……その席に福沢も出ていた。話してみると面白い……忽ちに<sup>(註2)</sup>して百年の知己のごとく懇意になった」と述べてあるのをとり上げるべきである。

ところが同じ大隈侯の直話として伝えられるものに、次のようなものがある。「吾輩が福沢先生を始めて知ったのは、明治四年の暮か、五年の初めで、廢藩置縣の実施された時であったと思ふ、一度知り合ってから、非常に懇意になって、先生が吾輩の処へ来ると、家内共まで懇意になって居るから、一緒に晩食を食べる事もあったが、……殊に政治上の秘密談は此家の奥にある一室で、他人を入れないで、家内が酌をしながら話をするやうな事が多かった<sup>(註3)</sup>」同じ人の直話であるだけに、何れをとるべきかに迷うのであるが、個人の記憶にこのような不正確さの伴なうことは注意しなくてはならない。

その後、親密な関係が続けられたことはいうまでもなく、大隈参議の施政を理解し、それに同情を寄せる方向にあったことは想察してよい。しかし、相互の交渉の内容を文献の上から明かにする資料は、「通貨論」の草稿を纏めるについて、その資料を求めた書翰までは見出すことを得ない。一般的な深い交渉は生じたにしても、ここに問題とするような、政策上に結果の現われるような関係は、それまではまだ生れなかったと見てよいのであ



ろう。

次に挙げる大隈参議へ宛てた書翰は、両者の関係、立論の根拠などを理解する上にも興味があると思われるが故に、次にそれを引用しておく。

「嘗て御話申上候通り、通貨一事に付小生の所見を新聞紙に出す積りにて先ず冒頭に一篇を記し、一両日中民間雑誌に発兌申付置候間、草稿入御覧申候。然るに此趣向に説出しては、日本貨幣の沿革、西洋諸国の事情をも詳にせずして不叶次第、何卒御手筋に實際の記載も御座候はゞ拝借致度奉願候。僕が立論の主義は、紙幣が多ひにも少なひにも先づ金銀貨と紙幣との性質を知り、日本國中經濟の情実を詳にし、然る後に多少の議論をもせよ、根もなき空論を茶話同様に喋々する勿れと申趣意にて、何れ五六編も説論する積りに御座候。何卒参考の爲書付類拝借奉願度、尚又この新聞を田舎の区戸長其外の者へ示し度、其辺に付てもよき御工風御座候はゞ御示し奉願候」

この書翰による要請に対し、大隈参議がいかに速かにそれに応諾したかは、次の書翰によって知ることができ。當時の通貨政策についても、両者が相呼応するところのあったことが知られるのである。即ちこの頃の政府の洋銀政策については、すでに相当に福沢の献策がとり上げられていたことを想定してよい。この以後の正貨政策についても、福沢の策論と符節を合するものが少くない。そして通貨論の一篇は、実はこのような政策論の基礎を示すものであった。ここにいう書翰の内容は次のようなものである。

「昨日は土山氏(註)より来報、先日御願置候書類明日騰写出来、御遣し可被下旨難有奉存候。然るに昨日は洋銀六十六匁壹分五厘、金円は殆ど十二円、洋銀の騰貴はアメリカの一条に原因せし事ならんと雖ども、斯の如きの高

価は近來無比、若しもこの風聞各地方へ流布致候ては以の外なり。旁々横浜にて実に洋銀の入用は多からず。近日これを買ふ者は唯虚に乗じて虚利を得んとする者より外ならず。依て愚案に極て悪策なれども、今明日にも洋銀百万円斗りも売出し一時の人氣を鎮静しては如何。人氣一度び鎮りて後に策もあるべし。僕も先日より思案を運らし、既に昨日の民間雜誌に一編を記し置き、尚草稿は五六編出来居候得共、乙な処に出ては却て不都合、今日は少しく考へ居候。右は喋々申上る迄も無之、必ず高案ある事ならんと雖ども為念申上候義、大凡の御腹稿被仰聞被下度、大丈夫の押へ処さへあれば新聞も憚る所なく發兌の積に御座候。……尚以人氣は妙なものなり。三四日前より十錢二十錢の銀貨までも通用少しと申事なり。即ちパニックの玉子なり。其實笑ふべくして其成行は則然らず、其恐るべきなり。<sup>(註6)</sup>「これらの書翰は、両者の交渉すでに緊密に、政策上にも共鳴するところのあることを示している。

「通貨論」一篇の中を流れる思想については、次に節を別けてこれを述べたい。福沢先生の金融についての論説は、通貨論に始まったといつて不可はなく、その後数年、その思想に沿つて展開された。そしてその間、福沢先生と大隈参議との金融に関する考え方は、思想的にも政策的にも互に照応するものであった。正金銀行設立の着想の如きも、実はこのような環境の中にはぐくまれ、次第に実を結んで行ったものであった。

註(1) 田口卯吉、自由交易日本經濟論、鼎軒田口卯吉全集第三卷所収。岡田俊平、幕末維新の貨幣政策(昭和三〇年)、一六三頁以下参照。

註(2) 大隈侯昔日譚(大正一一年)二五〇—一頁。

註(3) 箒庵高橋義雄編、福沢先生を語る、諸名士の直話(昭和九年)四—五頁。

註(4) 福沢書翰、明治一一年二月二八日付、大隈重信宛、続福沢全集第六卷、二一五―六頁。

註(5) 土山氏とあるは大蔵省六等出仕土山盛有を指すであろう。明治八年一月大隈大蔵卿は「収入支出の源流を清まし理財會計を立つるの議」を三条太政大臣に提出して、會計制度確立の意見を述べたが、同題の意見書が明治七年十二月、土山盛有によって大蔵卿に提出されている。大隈文書、A七、A一四〇〇。また大隈文書中に残っている書翰から見るとアメリカに留学したことがある。大隈文書、B一三〇。

註(6) 福沢書翰、明治一一年三月三日付、大隈重信宛、続福沢全集第六卷、二一六―七頁。

### 三、福沢「通貨論」の構成

貨幣についての福沢先生の見解を要約するというならば、古典学派のそれと相通するものであって、これは当時最もひろく行われた考え方であった。即ち、貨幣は交換の媒介手段であるとしながら、すべて財貨の価値はその生産に必要な労働の量によって測られると見る。その場合貨幣は財貨の一種であって、両者の間に差別をおいて考えない。その意味において金銀貨を貨幣の正体と見ながら、一般の流通のためには紙幣こそ却てよくその目的に適うが、そのためにはその数量が適切に制限されなくてはならないという。即ち正貨を価値の測定としながら、兌換によって数量の調節される紙幣を用うることが、はるかに経済的であるというのである。リカードの主張した「経済的にして安定なる通貨の提案」があることは、ここに想起しておく必要がある。<sup>(註1)</sup>

「通貨論」においては金属主義の立場をとってあるが、しかし開明の社会においては、必ずしも金銀を以て貨幣を造るを要しないので、紙幣の方が却ってよいという。「商売取引の上に就て通用貨幣の機能を論ずれば、単

に之を品物の預り手形と云て可なり」何屋何兵衛と記したる手形なれば唯其何屋ばかりに通用す可きなれども、通用貨幣なれば綿屋にも酒屋にも或は無商売の人にも、國中一般に通用するの別あるのみ」とする。<sup>(註2)</sup>この考えは今日いうところの指図証説 (Anweisungstheorie) を思わしめるものであって、金属主義でありながらゼイ・エス・ミルが、貨幣は一般の財貨を得ることのできる切符であり、指圖書である、としたことと相通する。<sup>(註3)</sup>

先生は、通貨には紙を用いて妨げがないのみならず、金銀を用うるのは無益であるとした。紙幣と金銀貨とを比較して、その通貨たる機能においては少しも差別はないとし、事実の上には紙幣の方に便利が多いとした。これは一見ノミナリズムの立場をとるように思われるが、その数量の適度であることを前提し、金銀貨幣を基礎とすることを忘れてはいない。これは当時一般に行われていた正統学派、ことにリカード等の所説と一致するものである。

金銀は容易に得がたいものであるから、それを基礎とする限り、造幣の権を政府に握っても、妄りにこれを造ることを得ないので、自からその数量を制限する方便となる。若し紙幣を通用せしめて、これを制する權利を政府に与えたならば、通貨の発行は際限がない故に、物価は次第に沸騰するという説に対しては、これは畢竟政府を信じないものであって、政府を疑えば際限はなく、一切万事不安ならざるはないという。その主義とするところは、一国の政府を信ずべきものとして論を立て、紙幣の便利なことに左祖するのである。<sup>(註4)</sup>即ち紙幣制度を謳歌するけれども、それは発行の適正なことを前提するのである。

然し政府が紙幣を発行するのは、その会計上最も容易であって行い易いことであるから、国民の利益を奪うという悪意はなくして、知らず識らずの間に紙幣を増発する弊害がないとはいえない。国内に紙幣のみを発行して

その数量が多きに過ぎるときは、物価は騰貴するが、それは名目のみであつて実の高直ではない。紙に対する高直であつて金銀に対する高直ではない。金銀に対しては却つて下直であることがある。故にこのような場合に外国から金銀を輸入すると、名目上は高直の貨物を実質上は下直に売渡す結果になる。

例えば幕末の頃、世人はつねに日本の諸色が高直であるといったが、それは紙幣に等しい新鑄の通貨に対して高直であつたのであつて、その実を正味の金銀に較べれば甚だ高直であつたのではない。嘉永年間に外国貿易が始まつたがそのために、外国から洋銀を輸入して名目の高直の貨物を、安い実価で売渡したことになる。故に当時日本で紙幣のみ通用して、それが全国の商取引に必要な高よりも多きに過ぎたならば、諸価格は高直となり、金銀も高直となつて、日本の国産を外国の金銀と交易して損失を蒙むこと、開港の初めと異ならない結果となると説いた。<sup>(註5)</sup>

福沢先生の主張によると、開港のはじめ日本の蒙つた大損失は小判の輸出であつた。当時日本では保字小判（天保八年改鑄、慶長小判に比して約五六・六%を減価したもの）以上の古金の通用は甚だ稀れであつて、多くは一步銀、二朱金等を以て売買していたから、小判は通貨ではなくして品物というべきであつた。この保字小判一枚を買うのに、一步銀四個よりも少し高ければこれを高直だといったが、その高直はただ紙幣に比すべき二朱一步に対して高直であるが、正銀に対すれば甚だ下直であつたが故に、洋銀の輸入によつて大なる損失を蒙つた。安政条約には、日本の貨幣と外国の貨幣とは、同種同量を以て引換えられるべしとしてあつたから、外国商人は四シリング三ペンスの価であるグラシーを一步銀三個に換え、これを以て金の小判を買つたから、百を以て三百の利を得た。これは日本で紙幣に比すべき一步銀を通用して、金銀の割合を等閑に付したから生じたことであつ

た<sup>(註6)</sup>という。

以上のような禍いを防ぐ方法としては、世界普通の相場に従って金銀貨幣の位を定め、その貨幣の名目に準じて紙幣を発行すればよい。国内に通用するものは紙幣と定め、その外に若干の金銀貨を交ぜ用い、両者の釣合いを見ることが肝要である。両者が大体同様に通用する間は、紙幣が多過ぎない兆候とすることができ、若し紙幣の相場が下落して金銀との間に大なる差を生ずるときは、直ちに紙幣の量を減ずるの法を施さなくてはならない。このように用意してつねにその時機を失わないならば、紙幣の下落する恐れはないと説いてある<sup>(註7)</sup>。

かくして紙幣と金銀貨との間に大なる差がなく、安心の点にあれば、準備は殆んど不用のものである。社会の流通に必要な量だけの通貨であるならば、それは金貨であると紙幣であるとかかわりなく流通に用いられ、従ってそれに対して準備金をおく必要はない<sup>(註8)</sup>という。しかしここで金準備が不必要であるといったのは、全くそれが必要とせず、紙幣本位でよいという意味ではない。特に「殆んど必要がない」としてあることを注意しなければならぬ。

上述するところによって知られるように、金銀貨をはなれて紙幣を考えているのではない。紙幣を発行するにも、その基準を定めるために一部分の金銀貨を交ぜ用うる必要がある、民衆の安心を得るために多少の準備金を用意すべきであり、また非常のとき外国に輸出することのできる金銀を貯えておけばさらに心配はない。このような場合を挙げて、金銀貨幣の必要なことを認めているのである<sup>(註9)</sup>。

それでは、通貨の価値の低落によって打撃をうけるものは誰であろうか。先生の主張によると、貨幣の改鋳にしても、紙幣の増発にしても、それによって難渋するものは富者であって貧者はそうでない、というものがある

がそれは誤っている。金持と現金を持つている人とは混同してはならない。富商大賈は必ずその身に比して過分の実物を支配し、貸金よりも却って借金が多い。商人は現金を所持する人ではないから、通貨の下落に遭うても禍を被ることは少ない。損失を蒙るものは身代を金の形にして家に蔵するものであって、それは社会の中流以下に多くして上流には却って少い。都会には少くして田舎に却って多い。かく考えれば、通貨の低落によって打撃を受けるものは、社会の良民であつて特に産を成そうとするものであるが故に、その与える害は甚だ恐るべきものである、と通貨論は結んである。<sup>(註10)</sup>

通貨論は西南の役の後、紙幣の増発が漸く世人の注意を引いて、論議の対象とされた頃に稿をおわり（明治一年四月一五日）、同年五月に出版されたものである。全篇の趣旨とするところは、当時通用紙幣の議論が甚だ多くなつたが、その本来の性質およびその量の過不足を詳説して、利害得失を断ずるに足るものがない。たとえ臆説を唱えるにしても、なるべく力を尽してよく事実を詮索し、然る後に論議すべきであるとして、軽卒に論議することを戒めたのであつた。

上述する如くに、比較的詳しく通貨論の内容を辿ってきたのは、小冊子ではあるが当時一般に信じられていた古典学派の理論に沿ひ、よく纏められたものと思うからである。よく現実を見つめて理論を立てたことについてこの一篇には大きな価値を認めねばならない。ただここで注意しておきたいことは、当時すでに不換紙幣の及ぼす影響は指摘され、紙幣の下落は萌していた。それにも拘らず、紙幣の価値はその適正な発行数量によって維持されるとしながら、またそれは兌換の制度によって保たれることを認めながら、毫もその方向に沿うての政策の主張がなされていないことである。これは当時の政策を是認し、通貨の発行は適度を失っていないと認めたこと

福沢諭吉の明治初期金融史上の地位

に因ると見なければならぬ。

その後明治一八年の頃に至るまで、通貨に関して数篇の論文が時事新報に載せられたが、それはおうむね通貨論に述べられた主張の骨子に沿うたものであった。福沢先生の通貨金融論議が、かくして明治一〇年代に集中せられ、維新当時の混乱せる時期に現われなかったことについては、ひろく福沢研究家に教を請いたいところである。

註(1) David Ricardo, *Proposals for an Economical and Secure Currencies*, London, 1816.

註(2) 福沢諭吉、通貨論（明治一一年）一四、一五頁。

註(3) J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, Ashley's ed., p. 487. 拙著、貨幣の本質（昭和二年）七八頁。

註(4) 通貨論、二五—六頁。

註(5) 通貨論、二七—八頁。

註(6) 通貨論、二八—九頁。

註(7) 通貨論、二九—三〇頁。

註(8) 通貨論、三一頁。

註(9) 通貨論、三一—四頁。

註(10) 通貨論、六九—七〇頁。

四、横浜正金銀行設立の発想

西南の役後、紙幣の増発、正貨の減少、物価の騰貴が次第に顕著になってきたとき、参議兼大蔵卿であった大



限重信が正貨流通促進のためにとつた二つの大きな方策は、横浜洋銀取引所の設立と横浜正金銀行の設立とであつた。

洋銀取引所は明治一二年三月一二日開業の式を挙げたが、それよりやや後れて同年夏の頃から、正金銀行設立の氣運が動いてきた。その主旨とするところは、海外に向つて為替荷為替の事業を開き、内外貿易の間に介して金融を調和し、かつ漸次正貨が殖えて基礎が確立したときは、金札引換公債証書を担保として、兌換紙幣発行の特許を得ようとするにあつた。中央銀行のなお存在せず、その設立の要望されていたとき、併せてその機能にも役立たせようとする考えの動いていたことは事実である。これが何人の創意に出發するかは断定しがたいが、福沢大隈の緊密な提携によつて實現されたことは、現存の資料によつて明かにし得ることである。

当時アジア諸国はまだ銀貨通用の域を脱していないところから、ヨーロッパ流の金兌換の中央銀行に對して、銀貨の流通促進をはかるべしという説が強く出されていた。大隈文書の中に、バッチェルドン氏 (J. M. Bat-chelder) 建言「貨幣の政を救済するの策」<sup>(註1)</sup>というのがある。八尾正文訳で美濃野紙六枚、執筆の年月も提出の形式も明かでない。内容から判断すると、明治一二年頃に執筆され、大隈参議に提出されたものと思われる。明治七年から一三年にわたつて、この人の書翰が三〇通も大隈文書の中にある。その中には汽船の売込み、支那の情報提供などがあるところから見て、当時日本にいてひろくそのような事業に活動していたものと思われる。シルヴァー・バンク設立の利益を述べて、それを勧奨したものであるが、實際政策の上にこれが何程の影響を与えたか、は明かにすることを得ない。或いは当時の政策を動かす機縁となつたものかも知れない。

それによると、日本は過去十年、戦乱のために支出が多く、国民に多大の負担を加えたが、通貨は社会の盛衰

を支配すべき有機的のものであるから、それには兌換性をもたさなくてはならない。そのためにはキリヤリング・エクスチェンジ・エンド・シルヴァー・バンク (Clearing, Exchange and Silver Bank というのである) を建てれば、その利益はきわめて大きい。資本金は一千万円とし、アメリカのモニー・キング (富豪財閥の意であろう) 等と協議して、一半を日本政府および銀行家から出すこととし、銀行紙幣を発行せしめるがよい。これによって紙幣および洋銀の相場を一定せしめることができ、一大銀市場を日本に建設して、多大の利益を収めることができる。このような銀行を設立する計画のあることが一般に知られるならば、紙幣の信用を回復して正金との差は直ちに解消され、日本の当面する諸困難は克服される、というのである。内容においてはまさに正金銀行発足の意図と同じものということができる。洋銀相場の抑制をも考える点から見ても、この提案は或いは洋銀取引所の設立に先だつものとも見られる。

さらに大隈文書の中には、「貿易銀行条例」という草案がある。<sup>(註)</sup> 何人の立案になるものか不明であり、これにどれだけの考慮が払われたかも判らない。とにかく当時の通貨の混乱状態を救うために、貿易銀を基礎とする発券銀行を設立しようとするものであった。内容は正金銀行の着想ときわめて近い。

その大要を述べると、銀行の資本金総額は三〇〇万円以上とし、貿易銀を以て払込ましめる。大蔵省はこれに対し資本金の十分の五以上を出資する。銀行は資本総額の十分の八を超えない通用銀券を発行し、これは国内何れの地においても、租税、海関税その他公私一切の取引において、政府発行の貨幣と同様に通用せしめる。銀行はその引換準備として、銀行券流通高の三分の一以上の貿易銀を備え置き、何時にても兌換の要求に応ずる。頭取は株主中から選挙して大蔵卿の承認を経て定める。取締役の半数は株主中から選挙し、半数は大蔵卿が株主

以外から任命する。銀行はその營業として、右の銀券の發行の外に、一般の銀行業務を行うといふのであつた。かくの如くして、正貨政策の一環として銀行を設立することには、二三の想源があつたかも知れないが、事態は内々の裡に進められつつあつた。当時福沢先生から大隈参議に宛てた数通の書翰は、よく当時の情勢と共にその経過を物語るが故に、次にそれを掲げたい。

明治一二年八月二日付、大隈重信宛書翰<sup>(註3)</sup>。横浜の洋銀、当春の騰貴以来先づ平に歸し目出度事には候得共、

結局其勢を挫くにあらざれば再騰なきを期すべからず。其再騰は兎も角も全体に洋銀の面目を失はしむるに非ざれば、我貿易銀の流行も埒明申間敷、唯今の勢にては我商人は品物売買の外に、又洋銀を以て窘めらるゝ者なり。依て先日より一二友人と談じ様々談論の末、別紙一冊出来申候。何卒御熟覽被下度、此一事所謂山師<sup>(註4)</sup>の手に掛りては、徒に政府をして私の山を助けしむるに過ぎざることなれども、自から亦慥なる人物なきにあらず。其人物あれば、政府は唯庫内の金を外に出して準備に用るに異ならず。毎日驗査するも可なり、毎週報告するも可なり。且大丈夫を押へて無利足と覚悟を定るも必ず利なきを得ず。十数年の後は其利足の嵩みたるものを以て、恰も一種の常平局を設け、洋銀なり貿易銀なり、終年注意して其調子を取らば、当春の如き騒もなく、永年に平均して我貿易の爲には大なる利益ありと存候。

右の一条、若し思召御座候はば御相談の上これと申人にも可申上、又は御預け金の手数順序検査の方法等も相伺度、小生は大蔵の全局を知らず、唯貿易一条に付外人に利を占めらるゝを不快に覚へ、最も大切の事と存候より態と申上候。篤御勘考被成下、夫れにも不及との御見込に候得ば亦唯夫れ切りの事のみ、思付の儘申上候間可否の御報奉願候。或は事に依り御着手の御思召も御座候はゞ、一日をトし参上候ても宜敷、此段要用申上度早々

頓首。

追て本文の事は、随分山師有志者の好む所のものならんと存候間、若し御着手の思召なくば誰にも御話被下間敷、徒に山師に貸すに山の種子を以てするのみ。」

これによって知られるように、具体的な計画はこの頃に始まるといつてよく、しかもそのことは福沢先生から積極的に働きかけたと見られる。その意図するところは、洋銀の動揺を除いて貿易の発達をはかり、銀を基礎とする貨幣制度を確立しようとするにあった。その間の往復の経緯はなお詳かにしえないが、四〇日を經過して、次の書翰は事態のさらに前進したことを示している。

明治一二年九月一二日付書翰、大隈重信宛<sup>(註5)</sup>「……バンクの一条はい才小泉へ申含置、同人より御話申上候積にいたし置候。此一事に付先日御話の通相違無之、他えもいまだ御話もなく急度御役立の事に至らば、小泉始め中上川も共に尽力して恥かしからぬ成跡に至り可申、何事も途中に変じては誠に困却、他人に信を失ひ始終の妨相成候間、弥以無間違処を小泉え被仰聞被下度、既に先日の御話に由り、極々信すべき都合の人えは内々話しもいたし置候事に御座候。」

これによって見ると、計画はきわめて内密の裡に進められていたようであり、小泉信吉はその中心に参画していたのであるが、十月に入るや先生は中村道太を推薦するに至った。即ち、次に掲げる書翰はその消息を伝えるものである。

明治一二年十月五日付書翰、大隈重信宛<sup>(註6)</sup>「……過日拝趨の節極内の御話の一条は其後小泉より承り、追々御着手にも可相成由、就ては爰に一人あり名を中村道太と云う。此人は旧豊橋藩会計、頗る地方の名望を得て既に豊

橋の銀行も同人の起立、老生は多年懇意致し極て慥なる人物に付、実は此度の一条も弥以御着手相成候には、學者の外に実地熟練の人なかるべからず。即ち此任に当る者は中村道太ならんと存じ少しく秘事も洩し候処同人にも大に説あり（但し洩し候共此人より他に洩るゝ恐なし）。就ては最第一の緊要は人民の金を募るに在り。此金を募るに付中村なれば江州大阪等に知人甚多し。何卒御内意を承て其方に取掛度との義、其辺の事も唯今銀行云々の事を公然と申す訳には不参、何とか名義を付けて江州大阪其他新潟の方へ参り度との事に御座候。右の事情は小泉より可申上善いたし置候得共、何は扱置此中村えは一度御逢相成候ても随分面白かるべきと存じ、為に一書を認め同人え相渡候間、罷出候はゞ御都合次第御逢奉願候。尚い才は本人より可申上、洋銀等の事に付ては随分説ある人なり。一時間斗りの時を御費し御話奉願候。右要用申上度早々頓首」。

ここにいう中村道太については、帳合の法に関連してすでに述べたが、なお詳細を述べることに私は大なる興味をもっている。つとに福沢先生の推輓を受け、明治初期の経済発達に大きな寄与をしたが、一朝蹉跌して後年甚だ振わず、資料の伝わるものも頗る乏しいからである。

中村道太は天保七年、吉田藩の勘定方中村哲兵衛の長男に生れた。一小吏の子に生れながら世に出ることを得た主たる原因は、生來の聰明によるが、福沢先生の知遇を得たことにあり、またその推薦によって大隈参議に知られたことによる。後年彼が失脚するに至ったのも、大隈参議との関係にあったことは全く数寄の運命である。

彼は文久三年二八歳のとき（このとき福沢は三〇歳）、はじめて鉄砲洲の福沢先生を訪れた。当時彼は小役人格二人扶持の身であつて、西洋流兵学修業のため江戸に出ていた。その後しばしば先生の許に出入し、福沢門下の小幡篤次郎、莊田平五郎、早矢仕有的等と相識るに至った。

丸屋商社（今の丸善株式会社の前身）は福沢先生の指導により、洋書、薬品等の輸入販売を目的として、明治三年早矢仕有的を社長として横浜に開業し、東京、大阪、京都にも売場を設けていた。中村が丸屋に入社したのは明治五年十月であるが、おそらく先生の勧めによったものであらう。財政的にすぐれた手腕をもち、計数のことに明るいところから、その推薦により早矢仕社長を補佐するためであったと思われる。「丸屋商社之記」の末尾には、早矢仕有的と同列に社長として中村の氏名が記されている。<sup>（註7）</sup>

丸屋に入社後も彼はしばしば東京豊橋の間を往来していたが、明治八年旧藩士族を語らって豊橋に最初の銀行組織たる浅倉屋積金所を設け、さらに明治一〇年には資金の調達に奔走して、豊橋に第八国立銀行を設立した。しかも彼は表面に立つことを欲せず、頭取支配人には他の人を推し、自らは蔭の人として終始した。しかし世間はその才幹を見落すことなく、その後郡制の施行にさいし、推されて初代の渥美郡長となった。これは明治一一年十二月のことであって、福沢から銀行のことについて急ぎ上京を促されたのはこの頃であった。

中村は郡長就任の翌年十月、福沢先生から長文の手紙を受取った。彼の直話として伝えられたところによると、「そこで東京に出て参ったところが、先生が其夕刻から大隈を尋ねるから一緒に来いといわれるので夕刻から出かけました。其時先生は三田に居られ、大隈さんは雉子橋に居りました。多分人力車に乗って行ったと思ひます……」<sup>（註8）</sup>

かくて横浜正金銀行設立の計画は軌道にのせられたが、中村道太と小泉信吉とは最初からその中樞に立つ人として、先生の意中に描かれていた人であった。頭取副頭取の地位にいたたのはそのためである。大隈の正貨政策に対して批判の強くなっている中に、この計画を推進するについては多くの困難があったことが想像されるので

ある。

なお正金銀行の創立については、裏面に別に一つの動機があったように伝えるものがある。それによると、正金銀行の創立を計画した動機は、早矢仕有的が丸屋商店の衰運を挽回しようとして、中村道太外一二の友人を語らい、協同して種々苦策をめぐらし、ついに銀貨の投機売買にも手を出して失敗したので、その失敗をとり返えそうとして、銀貨半額紙幣半額を以て資本金二、三十万円の小銀行を設立し、貿易商人並に投機業者の間に立つて、紙幣に対して銀貨を貸し、または銀貨に対して紙幣を貸し、日歩勘定で利息をとる仕事を始め、その傍ら自らも投機売買を試みようとした、というのである。

このことを早矢仕の知友であった福沢翁に謀ったところが、翁の緊切な助言によって立派な論拠もできたので、中村道太は翁の紹介で大隈侯に会見し、その意見を述べたところ、幸いにその賛成を得たのみならず、さらに候の意見を聞いて資本金をその十倍に増し、三百万円の大銀行を設立するに至った、(註<sup>1</sup>)ということである。

当時銀貨の投機頻りに行われて、産を傾けるものも少くなかったことは事実であり、これは一見裏面の真相を伝えるもののようにも見える。しかし上述の資料に基づいて見るとき、事実のそこすることを知り得るのである。非公刊のものとはいえ正金銀行の歴史に載せられている限り、或いはこれに惑うものないかを恐れる。よって特にここに引用して、同銀行史を見る人の判断に委ねたい。

註(1) 大隈文書、A一七七一、パッチェルドル氏建言「貨幣の政を救済するの策」。

註(2) 大隈文書、A一一九八、「貿易銀行条例」。

註(3) 福沢書翰、明治一二年八月二日付、大隈重信宛、続福沢全集第六卷、二三八―九頁。

#### 福沢諭吉の明治初期金融史上の地位

註(4) ここにいう別紙一冊は、銀行設立の方策を具体的に記したものであろうが、その内容を知りえないのは遺憾である。

註(5) 福沢書翰、明治一二年九月一二日付、大隈重信宛、続福沢全集第六卷、二四〇頁。

註(6) 福沢書翰、明治一二年十月五日付、大隈重信宛、続福沢全集第六卷、二四一頁。大隈文書、B一三二。

註(7) 丸善社史(昭和二六年)附録丸屋商社之記、一八頁。石河幹明、福沢諭吉伝第二卷、八一―九頁。

註(8) 高橋義雄稿、福沢先生事績探問録。福沢諭吉伝第二卷、八三五頁参照。書翰では中村道太を大隈参議に紹介されたようになつており、この記述と一致しないが、ここにはそのままを引用しておく。この稿本は今伝わらず、慶応義塾図書館においても見ることを得ない。その中の一部を削除したものが、箒庵高橋義雄編「福沢先生を語る、諸名士の直話」(昭和九年)として出ているが、中村道太については全く除かれている。

註(9) 横浜正金銀行史(大正九年)六一―七頁。

### 五、横浜正金銀行の発足

正金銀行の設立については政府の出資を期待すると共に、ひろく一般の資金を集めることを企図していた。それにも拘らず内密に事を運ぶよう頗る苦心していたことは、むしろ不思議のことといつてよい。反対の意見を押しきるために避けがたいことも知れないが、その間に伏在した事情については、今から想像も及ばぬものがある。次に載せる二つの福沢書翰は、よく当時の状況を伝えており、銀行の設立準備は進められて、成立の見込は確実についたことを示している。

明治一二年十月一三日付、大隈重信宛書翰。<sup>(註1)</sup>「過日拝趨の節御内話のバンク一条、創立の当分官よりデポシッ



トの内援あれば必ず首尾能行はれ可申、小生も之を信じて疑はず、何卒遂には官の預け金止めて人民の私有預け金と入替候様いたし度事なり。此事も亦或は難きにあらざるべし。就ては何分大金の義に付、人物を定め候上は尚明白にも不申聞候得共、仮に言葉を設けて若しも今の世の中に斯る事のあらば、金を出す者あるべきや否杯と遠廻しに申談候処、中村道太杯は固より之に任じて自から疑を容れず。其外弊塾旧生徒北越の一豪商某も此程出京中、素より家人同様の者に付これにも夫れとなく内話致候処、三十万円は一手にて引請可申との義、旁以今般の一事、其下た話は唯今より取掛候義に付其段御含迄申上置候。決して内実の实情は口外不致候得共、信ずべき人物丈けには聊か内談不致ては不叶次第、且御省の方にてても先日御内話の通不日公然御発令の事ならん。御発令次第中村道太始發起人数名にて出願可仕間極内に御含置被下様に内々の御指揮奉願候。何分とも一大事業、万万一も間違有之候ては、小生も親友に信を失する義如何にも恐ろしく思はれ候に付、念に念を入れ尚一応申上置候」。

明治一二年十月二四日付、大隈重信宛書翰。<sup>(註)</sup>「先達より御内話の銀行一条、中村道太、早矢仕有的等の談合にて知人の向え内話の処、存外都合よろしく、百万二百万の資本は立処に出来可申勢、畢竟今回の一事は通俗の銀行山師共を謝絶いたし候と申より、所謂金穴の隠君子なる者出現致候事と被存候。就ては尚中村より御内談仕度ケ条も有之由に付、何卒百事可然御差図奉願候○浮世商人輩の耳も甚顯敏にして、既に此一条に付奔走を始め候も有之よし、此義に付ては格別の御注意被下度、若しも浮世人の手に帰し又は此輩が大に關係する場合に至れば、先きの隠君子は直に手を引き可申、甚掛念に候間幾重にも御含奉願候。い才中村より可申上午序一書を添て此段申上候。」

中村道太については言を極めて推薦してある。その志願は、必ずしもこの銀行を立身の具に供せんとするのではない、その事柄が重大なる故に、一とたび自らの働きを試みんとするまでのことである。容体は素朴であるが理財のことには熟練があつて、都下の銀行家に一步も譲らない、御鑑定の上いかようにも取捨して欲しい、ということは中村について確言されたことである。

かくて諸般の準備が整い、明治一二年十一月一〇日。愛知県関屋町住中村道太外二名の發起により、国立銀行条例の趣旨に使い、銀貨三百万円を資本として、正金取引の大銀行を横浜に設立することを出願した。十二月一日大隈大蔵卿から「正金銀行設立の儀につき太政官へ上申」したがその一節に、徳川氏より今日に至るまで鑄造するところの金銀貨幣を概算するに、其外出せし分を除くも其現存するもの尚大凡一億円を下らざるべし。然るに其流通を市場に絶つ所以のものは他なし。其集散の中心なく一たびこれを支出すればまたこれを收入するの便なきを以て、人々つとめてこれを埋匿する弊習、実にこれが因由をなせり」と述べてある。(註)即ちこの銀行の設立によって、正貨を流通に引出すことが大きな狙いであつた。

同年十二月一日銀行の設立は許可されたが、紙幣発行のことは許されなかつた。設立の趣旨からいへばその一半は容れられなかつたことになるが、当時一般にひろまつた兌換制度確立の本筋に背くと見られたからである。大為替銀行として發展するために、一層それに重きをおくに至つたのはその故であつた。即ち明治一三年一月政府に御差加金を願出たときには、次のようにそのことを強調した。

「当銀行の儀は兼て創立願書中へも略陳仕候通り、差向金銀貨幣の供給運転を便にし、務めて内外貿易の間に介し、漸次外国為替の商權をも恢復仕度旨趣より發起仕候ものにして、其事業の容易ならざるは私共に於ても素

より熟知仕居候儀に有之、創立御許可以來日夜焦苦して将来保統抔伸の方法を考究仕候に、如此大事業は到底特別に官の御保護を得て、内外人の信憑を蒙るに非ざれば竟に其好結果を得難きは、当今の事態人情に於て実に難免情勢に有之、就ては当銀行資本金三分の一に当る金額、即ち一百万円を御差加金として当銀行へ御下附被成下<sup>(註一)</sup>たいと願出で、また特別監督のことを大蔵省に請願するに至ったのである。

かくて同行は明治一三年二月二三日開業の免許を得た。資本金三〇〇万円の中、政府差加金一〇〇万円は国庫準備金中より銀貨を以て出資せられ、民間出資の中四〇万円は銀貨、一六〇万円は紙幣、即ち三〇〇万円中正貨出資一四〇万円、紙幣出資一六〇万円を以て設立されたのである。正貨の流通を促進することを目的とするところから、正金銀行の名称は起った。ところがこの月、大隈重信は大蔵卿を解かれて佐野常民がこれに代わり参議專任となった。中村道太の頭取就任にさいし福沢先生は、居然装出一豪商東道主人謀得良楮片廿円之外套包羅三百萬銀行<sup>(註五)</sup> という狂詩を贈って祝意を表したのであった。

かくして銀行が業を開いてまだ一カ月に足らず、三月一六日には早くも増資のことが提案されている。大金を要する大事業と称せられたものが、意外に順調に進捗したために、いわば満風にさらに帆を張ろうとしたものと見てよい。事の当否はとにかくとして、当時の状況を卒直に示すものと思われるが故に、そのままにこの書翰を掲げておこう。

明治一三年三月一六日付、大隈重信宛書翰<sup>(註六)</sup>「昨夜小泉に面会承候得ば、正金銀行も先ず三百万を以て業を営み、追て資本の不足を訴るに至て徐々に増株と御内決にも相成候哉の趣、小生の所見は甚だ之に異なり、唯今の処にては横浜神戸其外の開港場に於て、亦も三百万銀円の入用あるべからず。されば唯今より営業して、当年に

も来年にも資本不足を訴るの日を期するは甚だ無覺束。然りと雖ども一方より考れば、日本人民の資金を集めて金権の一大中心を造るは実に止むべからざるの要なり。貿易のバランスを取るにも、内国金利の割合を左右するにも、金貨紙幣の鈐合を付るにも、皆唯金権に在るのみ。且今日金と紙との差あればこそ銀円の入用少きが如くなれ共、今後バーの日あるべきは論を俟たず。此日に至て三百万斗りの資本にては迎も目的を達するに足らず。少なくとも壹千五百万位にはいたし度、其用意は正に今日に在る事と存候。依て愚案に

五月第三期の金を集めて後に直に増株を募る事、蓋し第三期を集れば今の株主は過半の金を出したる者にて、恰も質を取りたるが如くにして其苦情を制する事易ければなり。

又本年の配当金は必ず少なき事ならん。目前の利少なきものは愚俗を誘導するに難きの患あり。故に其未だ配当せざる間に早く増株を募り度事なり。唯今なれば正金銀行の名望を以て金を集ること易し。又五月より募るとすれば、大蔵省は今の百万の外に又加入するを良とす、信を篤くすればなり。例へば資本を六百万にすれば省は二百万、九百万にすれば三百万等々、凡三分一は官金を交へ度事。

又右巨額の資本は差向其用なきが故に、株金集り次第不用の金を以て金札公債証書を買入、結局薄利の極は株主共へ六分の利子を授るのみ。政府の爲に謀れば其株金の札をば焼捨てて可なり、一挙兩得と云ふべし。

又増株を募るに其期を急にする所以は、今日まで都て諸銀行の評判甚だあしき者なしと雖ども、何れの銀行か一旦失敗するものあるときは、人民は直に銀行の名を恐れ其性質如何を問はずして之を忌み、之を避るの勢に至るべし。斯る反動の時勢に及ては、如何に正金銀行とても矢張同一視せらるゝの恐あればなり。故に増株を募るは正に当年中に在る事と存候。

右は小泉えも篤と談論、同人も異論なきが如し。何卒中村を御呼寄せ早々其支度に着手候様御説諭被成下度、都て大事を為すは其機あり、老台の御在職中畢生の一大事業として断じて御施行相成度事に御座候。以上拝趨御面話致度候得共、本月初旬より頭痛に難渋引籠居候に付、詳を尽するに足らず候得共、書を以て陳述如此に御座候早々頓首」

これによって見ると、急遽に増資を懇請するに至ったのは、銀行の経営に多額の資金を必要としたからではない。銀行設立の順調であつたのに乗じて、これを金融の一大中心機関にまで發展させ、大隈参議の威令なお行われている間に、これを断行させようとするにあつたようである。

為替銀行を設立すべきことは松方正義も認めていたことであつた。明治一三年六月、三條太政大臣に提出した「財政管窺概略」の中にも、「海外為替正金銀行を設立する事」を挙げ、「現今財政の急務は、内国の物産を興し海外に物貨直輪の便を開き、以て貿易の權利を掌握するを謀るに在り。其要旨は正金銀行を設立し、西洋の要地に向ひ兌換の事を行ふべし。故に此の銀行は最も確實にして外人の信任を失はざるものを至要とす。此の銀行は物貨直輪の爲めに兌換するを専業とす。而して楮幣の發行を許さざるべし」とした。即ちこれによって見ると、大隈参議の方策に反対していた松方も、銀行券の發行を認めないこの種の銀行の設立には、賛同していたといふべきである。<sup>(註一)</sup>

註(1) 福沢書翰、明治一二年十月一三日付、大隈重信宛、続福沢全集六卷、二四二頁。大隈文書、B一三三。

註(2) 同右、明治一二年十月二四日付、同書、二四三頁。大隈文書、B一三三。

註(3) 大隈大藏卿「正金銀行設立の儀につき太政官へ上申」明治財政史第一三卷、八〇九—一三頁。

福沢論吉の明治初期金融史上の地位

註(4) 横浜正金銀行史(大正九年)、附録甲卷ノ一、附録第三号。

註(5) この書幅には雪池と署名されている。豊橋市服部弥八氏の所蔵であったが、今は焼失して存在しないという。これは同家先代が中村道太の委託を受け、同地方において銀行の資金を集めるに尽力したことに報いるため、贈ったものである。(豊橋市住、小山伝三氏談)その写真複製は豊橋市立商業学校編、東三河産業功労者伝(昭和一八年)一三八頁に載せてある。

註(6) 福沢書翰、明治一三年三月一六日付、大隈重信宛、続福沢全集第六卷、二四四―五頁。大隈文書、B一七。

註(7) 松方正義伝、乾卷、七四四頁以下参照。

六、大隈参議挂冠の波瀾

当時まで中央銀行設立の問題が、解決されていなかったことは想起せねばならない。兌換制度を確立して、経済界の混乱を救うことの急務なるを説く主張は、すでに早くから唱えられていた。大隈参議にも、公債を新募して一大中央銀行を設立する企画のあったことは、私も他の機会にすでにそれを明かにした。<sup>(註1)</sup>しかし藩閥の対立から、また当時世上を騒然たらしめた国会開設、北海道官有施設松下などの問題と絡まって、民論はとみに騒がしくなった。維新草創の十余年、財政経済的勢力の中樞に座を占めていた大隈参議にたいする反対は、政府部内にも隠然と起りつつあった。

大蔵当局の間にあってさえ、その施政にあきたらないとする声は、次第にその勢を強めていた。松方正義は明治八年十一月、租税頭から大蔵大輔に昇っていたが、大隈の政策にはつねに反対の立場をとっていた。木戸参議

も、大隈の言に信用をおくことが出来ぬ、爾今財政問題に關しては、一に足下に談ずる所があらうと松方に述べた。大久保参議もそれに賛同するようになっていた。かくして内閣における大隈参議の勢望は、次第に薄らいでいたようである。<sup>(註二)</sup>

明治一四年九月六日、内務卿松方正義は「財政議」と題して、財政整理に關する建議を三條太政大臣に提出して、不換紙幣を整理して中央銀行を設立することの急務を力説した。それは全く大隈参議と所見を異にするものであつた。<sup>(註三)</sup>

この建議を提出した後、松方卿は参議伊藤博文を訪ね、国家財政の危急を論じて言つた、「帝国の財政をして今日の窮狀に陥らしめたのは大隈と卿との責任である。今日国家を救うの道は財政の根本的整理を断行するのみ、自分は深くこれを憂へて鄙見を三条首相に提出した、この議が行われないならば自分は職を辞せねばならない、卿はなお大隈に追隨してその職に留ろうとするのか」と。伊藤参議はこれに答えて「国家の将来に關しては自分も聊か考慮する所がある、卿の辞表提出は姑く中止されたい」と述べたと伝えられている。政情は急速度に動いていた。<sup>(註四)</sup>

このような急激に移り行く東京の政情を伝えるために、福沢先生は東北北海道巡幸に供奉中の大隈参議に宛て、十月一日付の書翰を認めて使者伊東茂右衛門を遣わした。文面以外の消息にも伝えたいものがあつたであろう。伊東は塾生ではなく、福沢家に寄寓して家事の世話をし、信頼を受けていたようである。大隈侯の直話に「この男は馬鹿のやうな男で」といつてあるところから見ると、いかにも実直な人柄が思われる。これがわざわざ途中まで出向いたことから見ても、當時の事態のいかに緊迫して感じられていたかが想察されるであらう。

大隈参議に宛てた手紙には次のように認めてあつた。前段に述べてあることは、当時福沢、大隈、伊藤、井上等によって計画されていた新聞紙発行のことである。

「何様の仕組にするも新聞紙發行と地方へ人員派出は必要の事にて、一日を後るれば一日の損失たる明なり。此義に付岩崎へ談候処、同人は固より其意はある様子なれ共、例の如く千思万慮、今に決断出来不申、結局如何致す積りなるや不相分、若し岩崎が決すること能はざるに於ては夫れまでの事にて、以来は相談相手にするに足らず、同人をば外物にして別に経営可致とて、昨今社友竊に協議致居候。実は老生の身に於て世の中の事に付いらざる世話に候得共、其正味を申せば近來塾も誠に盛にして生徒の数も殆んど五百に近し。既に卒業して故郷に歸るも仕事なし、東京に居ても不面白、或は商売或は記者等穴のあらん限りは探索し尽して侵入するも、尚無事に苦しむ者甚だ多し。此輩が日々の請求実は其煩はしきに不堪、亦其情を察れば随分役に立つべき人物にして、之を放却するも不本意と存じ当惑致すのみに御座候。

中村も相替義無之勉強いたし居候。筆不精の性質定て御無音致候義に可有之、正金銀行も其事務の實際に不都合はなき様子なれ共、兎角大なる物には衆目これに属し、世上にも亦政府中にも議論あるよし。井上氏杯も随分異論家の一人と申事、又今後如何可相成哉、油断したならば此銀行にも他人の侵入なしと云ふべからず。中村も中々心配に御座候。夫れにも拘らず老生は毎度金の事に付心配を頼み誠に氣の毒に存居候。

………<sup>(註)</sup> 才は不日御帰京の上御話可致候。」

かくて十月一日天皇北海道から還幸せられ、その夜千住の行在所において、国会開設準備に関する御前會議が開かれた。そこで大隈参議は辞職を求められ、悲憤を抑えて台閣を去ることになり、松方正義が参議兼大蔵卿



として財政の樞機を握ることになった。この間における大隈参議の心境は談話として伝えられており、惻々として読む者の心を打つものがある。<sup>(註<sub>6</sub>)</sup>

当時の状況を伝えた伊東の談話には、次のように述べてある。

「……福沢先生も大隈の消息如何と心配して、先ず私に夫れを見て来るやうにとの事なれば、私は御巡幸のお還り道に向つて、たうとう福島まで参つて、大隈に逢ひました。そこで東京の模様を話しますと、大隈はもう既に決する所あるものゝ如く、兎に角に一緒に帰るが宜からうと云ふので、後になり先きになりして東京へ帰り、御還幸の日に一と足先きに、私は三田の福沢先生の処に行つて見ると、中上川などが出迎へ、お前は途中で縛ばられて終うだろうと思つて居たが、能く歸つて来た、東京では我々を国事犯だとか云つて、警視庁から召捕りに来ると云ふ評判があるなどと言つて居りましたが、一向其様子が見えなかつた」<sup>(註<sub>7</sub>)</sup>という。不安な世情の裡に、急使を差立てられた状況も、これによつてほぼ理解されるであらう。

当時藩閥政治に対する民論の勃興が、国会開設の促進、代議制施行請願の運動となり、北海道官有施設松下の問題などと絡んで、火の手は全国に挙つていた。それは大隈の煽動によるものであり、その裏には福沢が参謀となり、資金は三菱の供給によるとまで噂されていたことである。

福沢先生は大隈退官の直後十月一四日付で、井上馨、伊藤博文両名に宛て書翰を送り、前年十二月頃からの相互に交渉の経過を詳細に認め、この度の政変について質問し、福沢の縁故者を無差別に進退せしめることのないように求めたが、満足な回答は得られなかつた。<sup>(註<sub>8</sub>)</sup>また先生が「明治辛巳紀事」と題し、当事の事情を手記して遺したものがある。日付は十月二八日となつており、末尾には次の辞句が見出される。「身を処するは士君子の重

んずる処これを等閑にす可らず依て今日の有様を記して之を子孫に遺し又或は時節を見計い親友へも示す可きものなり福沢諭吉記。」これは世上の流説に対して真相を伝え、またその立場を示そうとしたものであって、よくその心境を想察せしめるものがある。<sup>(註9)</sup>

大隈参議の挂冠によって、官途その他の要職にあった福沢門下の俊才は多くその地位を離れた。福沢大隈の合作によって設立された横浜正金銀行も、情勢一変せざるを得なかった。その後、中村道太は銀行経営の責任を問われて、明治一五年七月ついに頭取の職を退くに至った。

正金銀行を退いた中村道太は、その後諸種の事業に関係していたが、その中で彼の勢力の最も強く及んでいたのは、東京米商会所の頭取としての地位であった。しかし運命の追手はここにも及び、明治二五年、米商会所の資金を改進黨のために流用したという廉によって、囹圄の身となり、爾来三〇年、彼が大正一〇年一月、八六歳の生涯を終わるまで、ついに世に頭われることはなかった。誠に転変に富んだ一生であった。<sup>(註10)</sup>

正金銀行設立の史実は、このような経緯と照合させて見なければならぬ。福沢先生の明治初期金融制度に対する指導的活動は、おそらく明治一〇年代前半のこの頃を頂点と見るべきであろう。その後も福沢門下の多くの俊才が、大隈侯の政治的活動の羽翼となったことは周知の如くであるが、ここに問題とする範囲においては、特記すべきことを見出しえない。続福沢全集に収載された大隈重信宛書翰並びに大隈文書に収蔵される福沢諭吉書翰を見ても、明治一一年から一四年までに集中されており、外に明治一五年十二月および二一年三月のもの各一通を見出し得るにすぎない。両者の交渉もまた、その期間に最も密接であったと考えてよいのであろう。

註(1) 大隈文書、A二一。高垣寅次郎、近代日本金融史(昭和三〇年)一八三頁以下。

註(2) 拙著前掲書、一三九―四〇頁。公爵松方正義伝、乾巻、六〇〇頁。

註(3) 明治財政史第一四巻、二頁以下。公爵松方正義伝、乾巻、七八〇―九三頁。拙著上掲書、一七二―八頁。

註(4) 拙著上掲書、一七七―八頁参照。

註(5) 福沢書翰、明治一四年十月一日付、大隈重信宛、続福沢全集第六巻、二四九―五〇頁。大隈文書、B一三二。

註(6) 大隈重信関係文書第四、四六一頁以下参照。

註(7) 箒庵高橋義雄編、福沢先生を語る、諸名士の直話、二二〇―一頁。

註(8) 福沢書翰、明治一四年十月一日付、井上馨、伊藤博文宛、続福沢全集第六巻、四三―五一頁。

註(9) 続福沢全集第七巻、四五四―六二頁。

註(10) 豊橋市立商業学校編、東三河産業功勞者伝、一三九―四〇頁。

## 七、紙幣兌換促進の論議

明治一五年以後一八年までの間に、時事新報に載せられた福沢諭吉の通貨に関する諸論文には、通貨論(明治一五年三月)、紙幣引換を急ぐべし(明治一六年六月)、外債を起して急に紙幣を兌換するの可否に付東京日日新聞の惑を解く(同年同月)、紙幣兌換遲疑するに及ばず(明治一七年一月)、小銀貨にて紙幣を交換する事、(明治一八年八月)紙幣兌換の爲めには外債も憚るに足らず(明治一八年十月)等がある。何れも一連の論文といてよく、紙幣兌換の促進を主張したものである。

明治一〇年代の前半、兌換制度確立の急務が呼ばれたときに当っては、先生は固より紙幣流通の弊を認めたものではあったが、むしろ大隈参議に同じて正貨流通の促進を図った。その後半、大隈参議の後退と兌換制度の成立

を見るに至って、以上のような論議を頻りに発表されたことは、甚だ興味のあるところである。今ここに、それらの総てにわたって論述する必要はなく、主要な二三を辿って行くに止めたい。

「通貨論」は四回にわたって同紙に連載されたものであるが、題名はとにかくとして前の通貨論の改訂ではない。ここでは徳川幕府二百六十余年間の貨幣の沿革を述べ、貨幣の改鑄、その価格の低落は、不知不識の間に国民に損害を与えるものであって、政府は国民に対して約束を守る必要がある。明治政府は維新の初め、通用貨幣の一事については、俯仰天地に耻ずるなき処置を施して人民の信望を収め、外国に対して誇るべき立体の徳義を表した。明治一年以後の紙幣の低落はその源を尋ねれば、「紙幣の発行其度に過ぎたるものか、或は之を交換せざる為に然るものか、其責任は政府に在り」、紙幣の整理を促すことは、焦眉の急務であると結んでいる。<sup>(註<sup>1</sup>)</sup>これは一〇年代前半の大隈政策を批難する結果とならざるを得ない。

その他に特筆すべきことは、外債を起して紙幣の兌換を促進すべしとしたことであつた。「紙幣引換を急ぐべし」においては、紙幣の弊害は濫発の二字につきる。目下全国に流通する大蔵省札は一億円であつて、これを兌換するに何程の正貨を要するか判断に困難であるが、念のために七千万円の正貨を以てその業に従事すべしとして、二千万円は国庫の貯蓄金がある。残高五千万円は国債を起すべく、国内では望みがないから外国で募集するがよいとした。<sup>(註<sup>2</sup>)</sup>

これには日日新聞が社説において、「外債を起して紙幣を引換ふるは嘗て大隈君の説あり、今これと大同小異の説を出すは不思議なり。」「国債を起すは大問題なり」として反駁した。福沢先生はこれに対し、「政治経済の論は歌妓の衣紋に異なり、一概に其新奇なるを珍重するものにあらず。唯これを当世に施して其利害如何を顧

るのみ。説の珍ならず奇ならざるは、未だ其非を証するの理由とするに不足なるべし。抑も我輩が立論の標準は日本国民のために利害如何の外に求むべきものなし。……何ぞ我説の大隈重信君、松方正義君、若くは井上馨君の説と相似たると否らざるとを論ぜんや。」と云いまた「我輩とて紙幣と引換ふるには、国債を起して資本を得るの外他に一個の方案なしと云ふにはあらず。唯我輩は此方法を以て最便利のものと認むるが故に斯く為んと云ふのみ。」と論駁して、日日新聞のように具体的に方法を示すことなく、漠然と反対するのみであることを非難した。<sup>(註3)</sup>

紙幣の兌換を急ぐべしとすること、そのためには外債も憚かるに足らずとすることは、当時先生の強い主張であった。そしてこのことは明治一三年五月大隈参議が「通貨の制度を改めんことを請ふの議」において主張したことであった。これは外債五千万円を募集して、それを以て紙幣を消却し、正貨通用の制度を立てようとしたのであった。この建議の全文は明治財政史にも伝えられていない。松方正義の「紙幣整理始末」にはただ「十三年の初め紙幣の下落甚しきに際し、政府中一の建議者ありて、外国債五千万円を募集し一挙に不換紙幣を消却すへしと論せしも、終に裁可を得ざりし」と述べるに止まって、建議者の何人であったかさえ問題にしていな<sup>(註4)</sup>い。これは事実を不当に軽視したものという外はない。

この建議は当時政府主脳の中に、大きな波瀾をひき起したのであった。一部にはこの議が実施されて外債を起すことになれば、日本は破滅するといつて反対した。廟議は全く二つに分れて決定に苦しんだが、明治天皇の御裁断によって、ついにこの建議は採用されなかった。外債の募集がいかなる条件で可能であったか否かは別問題として、当時の情勢はすでに緊縮政策をとることの必要を示していた。大隈参議の識見は、すでに漸く容れられ

がたい形勢になっていた。大隈に代って大蔵卿となった佐野常民も内閣の諮問に答えて、この案には賛成しなかつた。<sup>(註3)</sup>

外債を起して当時の急を救うことに對しては、すでに大きな論議のあったことである。それにはアメリカの前大統領グラント(Ulysses S. Grant)が日本に來訪し、明治一二年八月一〇日浜離宮において明治天皇に謁見したとき、外債の弊害について述べた「凡そ一国において避くべきものは外債である。有力にして国産に富んだ国も、これがために漸く衰頹するの状がある。或る国は弱国に金を貸すことを甚だ好んでいる。これによってその威權を張り、弱国を籠絡した。彼が金を貸す目的は政權を掌握するにあつて、つねに金を貸す好機會を窺っている」と述べたことも、当時の政府主腦部を動かす大きな力になっていたであらう。外債の利弊については全く今日と見解の異なるものがあつた。<sup>(註4)</sup>

この時期における福沢先生の兌換促進の論議には、前述大隈參議の提出した「通貨の制度を改めんことを請ふの議」と一脈の相通するものがある。その頃両者の關係はきわめて緊密であつたことを考えると、共通の思想であつたと見て不可はない。福沢諭吉の金融制度についての論議は、明治一〇年代におけるほど顕著なものは、おそらく他にはなかつたといつてよい。

註(1) 福沢全集第九卷、一一一三頁。

註(2) 続福沢全集第一卷、三三一—五頁。

註(3) 上掲書第一卷、三三六頁以下參照。

註(4) 大隈文書、A一七。紙幣整理始末、一二一頁、拙著近代日本金融史、一四五—八頁。

註(5) 大隈重信関係文書第四、一二五―四八頁。明治貨政考要中編、一七八―九頁。

註(6) 岩倉公実記下巻、一六六五―六頁。

この一篇は、昭和三二年度文部省科学研究費によって行われた総合研究の一部をなす「明治初期金融制度の研究」の一節であって、さらに問題を一般的にして報告を続けたい予定である。ここに記してこの援助を与えられたことに謝意を表する。

この稿を纏めるについては、福沢全集を初め福沢研究の諸文献並びに大隈文書に負うところ甚だ多いことを、特に附記して深く感謝しなければならぬ。